

談話の最少単位と文字化の方法

沖 裕 子

キーワード：談話の最少単位 川上の「句」 文章と談話 案譜方式 文字化

1. はじめに

話しことばと書きことばは、連続的な面ももつが多くの点で異なっている。(注1)ここではひとまず、前者を談話、後者を文章と呼び、以下の3点について考察したい。

- (1) 談話の最少単位は何か
- (2) それを、どのように文字化する必要があるか
- (3) 談話観をどうたてるか

談話は日常生活では、文字でそのまま書かれることはない。談話は音声によって話されることばである。したがって、記憶に耐える媒体に置き換えなければ研究の対象とすることは難しい。たしかに、音声付映像資料作成もひとつの方法ではある。映像をそのまま検索する方法が発達すれば、すぐれた記憶媒体のひとつとなろう。しかしながら一方で、文字化資料の作成を試みることは、対象の精密な観察を助けることにもなる。

談話を文字化する営みは、談話のしくみの解明とともに進む。談話のしくみが明らかになった時、最終的な文字化方法も定式化されるだろう。しかしながら、談話研究が途上の現在では、どのように文字化するかをめぐって議論すること自体が、談話を解明する糸口ともなる。そこで、のちの修正を恐れず、現段階の考察を明らかにしておこうとするものである。

2. 従来の研究

2. 1 談話研究と文字化の意義

談話研究では、対象をどう捉えるかという問題から始めなければならない。文章の正書法は、談話をそのまま記述するには適さない。音声自体の表記には国際音声字母があるが、これは単音の記述のために用意された記号であり、アクセントやイントネーションなど超分節的単位の記述を目的としてはいない。

また、談話は、言語音のみの文字化では不十分である。文章はことばのみで文脈が生成されることを目的に書かれるが、(注2)談話は、発話者の声そのものやしぐさ、服装など、複数の情報が同時並行的に情報伝達の媒体となって、実時間に添って不可逆的に進んでいく。コミュニケーションに関与する非言語情報については、必要であればそれらにも着目し、文字化を試みる必要がある。

本論の考え方を述べる前に、従来の研究では文字化についてどのように考察されてきたか、ふりかえってみたい。現代日本語の成人の共通語談話を対象とした研究からとりあげる。

2. 2 「談話行動の総合テキスト—東京・下町・資料(1)—」

国立国語研究所(1980)は、談話そのもののしくみの解明を目指して行われた日本における初期の談話研究である。談話を行動として捉え、非言語情報も含めた文字化を試みている。

特徴は、実時間に添った文字化方法を構想したことである。5名の話者を上から並べ、会話が進んでいく流れに添って、これを分断せずに線条的にそのまま記している。

談話行動の総合テキストという名のとおり、非言語情報も表記しようとしている。ここでは「①非言語的表現の種類(うなづき、模写、指示、象徴など)、②非言語表現にかかわる身体部位、③非言語的表現が現れる時間的位置、④非言語的表現の動作主体および相手」が記載されている。また、付加的情報として「①テキスト本文の標準語訳、②言語的表現についての注記、③非言語的表現についての注記」が付されている。

カタカナ表記が採用され、時代を反映して手書きである。文字化は「いわば中程度でかつ常識的な表記をする方針」で作成されており、このテキストをもとに必要なに応じて分析の目的にそった精密なものが作れると判断されている。(注3) 声のスピード、声の質や大きさ、ポーズの長さなどは示されていない、顔の表情、各種動作の変量の程度は示されていない、言語的表現、非言語的表現両者のきわめて正確な対応関係を示す点で十分とはいえない、と解説にある。

発話の単位については、一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続(笑い、短かいあいづちも含む)を「発話」と呼び、音声言語面の単位としたとある。これらは、他の参加者の音声言語連続や時間的ポーズとの関連で設定されている。つまりは、時間的空白と話者交替のいずれかがあったところまでの連続をひとまとまりと考えているのである。資料にはそれぞれの末尾に「#」が付されている。「文」との関係でいえば、文の一部だけの場合も、複数の文が該当する場合もあるとある。

イントネーションは、観察可能な場合には上昇調、下降調、平調のすべてを記録し、顕著な音調が注意された場合は記述した、とある。

また、発話と発話の時間的な位置関係は、発話の冒頭部に留意して示したが、発話の終結点は、参加者の発話速度がまちまちであるため示しえなかったとある。

以下に、文字化の一部を引用する。

国立国語研究所 渡辺班(1980)の文字化

The image shows a transcription grid for a conversation. The grid has five rows labeled M1, M2, F1, F2, and C. The horizontal axis represents time. The grid contains handwritten text and symbols, including circles and arrows, indicating non-verbal information or timing. Below the grid, there are two columns of small text providing additional information or notes for the transcription.

2. 3 【方言談話資料(1)~(10)】

国立国語研究所は、「方言談話資料(1)~(10)」（1978年~1987年）を公刊している。手書きの文字化資料であり、すべて録音テープが添えられている。

方言語彙や語法を、より自然な談話資料の中で得ることが目的で作成された。注釈がついており、方言研究者の手で作成された信頼できる資料である。録音テープがついていることも、その価値を高めている。

文字化は、表音的カタカナ表記で分かち書きされている。分かち書きであるため音声的な切れ目は記載されず、発話の実相には必ずしも忠実ではない。あいづちは、その位置に括弧に入れて示され、実質的な話者交替があったところで、行をかえて表記されている。発話の単位については言及されていない。下線は発話の重複部分。

u>

以下に、文字化の一部を引用する。（『方言談話資料(1)』より「長野県上伊那群中川村大字葛島」の「稿手本の話」の冒頭部を引用。294頁。原文は手書き。(1)~(10)は注釈。）

国立国語研究所（1978）の文字化

-
- | | | |
|-----|---------------|-------------------------|
| (1) | (2) | (3) |
| A | オネーサマ コネーダ | ゴモシン シトイタ シマチョー モッテ キテ |
| | お姉様、 この間 | お頼み しておいた 稿手本を 持って 来て |
| | (4) | |
| | オクレタ。 | |
| | くださった？ | |
| | (5) | (6) |
| B | ハイ。 アノー | アリマシタモノデナン。 ニサンサツ ココエ |
| | はい。 あのう（捜したら） | ありましたものですからね。 2, 3冊 ここへ |
| | (7) | (8) |
| | ダシテ オキマシタノ。（A | <u>アシマシタ。</u> ） |
| | 出して おきましたの。 | ありましたか。 |
| | (9) | |
| A | ホーカナ。 | |
| | そうかな。 | |
| | (10) | |
| B | ハイ。 オゴランテ。 | |
| | はい。 御覧になって。 | |
-

2. 4 【日英語対照研究シリーズ(2) 会話分析】

メイナード（1993）は、日英語の会話の対照研究である。会話分析とある通り、文字化資料を使用した実証的研究をめざしている。

談話のしくみの解明を目指した研究では、当然のこととして単位の問題は避けて通れない。メイナードは、日本語はPPUが最少の単位であると主張する。PPU（Pause-bounded

Phrasal Unit) とは、ポーズによって区切られる語句である。文は、「PPUの次の単位」と考えられている。

文字化は次のように成されている。発話者が交替したところで行をかえる。それがあいづちであっても行をかえ、相手の発話のすぐあとにあいづちが送られる時は「Z」で結んでいる。PPUは「/」で、イントネーションについては、上昇イントネーションが認められる所に「?」を、また、「文末のイントネーションが認められ、文法的に文と認められる発話が終わる所」に「。」を記している。アクセントは重要な箇所のみ。頭の縦ふりと横ふりを、必要と思われるデータに限って記すという方針である。

以下に、文字化の一部を引用する。(96～97頁)

メイナード (1993) の文字化

(2) (M8: 大学の成績)

(2.1) A: だって/何かさ俺きのう山本に/さ学校の帰りくちに会ったんだ

よ。/ Z
(B: 1 Zうん)

(2.2) そうしたらさ/ Z
(B: 2 Zうん)

(2.2) 森さんがね/ Z
(B: 3 Zうん)

(2.4) だからいろいろ説明してくれた時に/ Z
(B: 4 Zうん)

(2.5) 何か/ 20以上だと/ Z
(B: 5 Zうん)

(2.6) あの商社/ Bとかさああいうところ/ だと大手商社だと 20で切ら
(B: 6 Zうん)

れるっていう/ 話だったらしいじゃん。/

(2.7) B: へえそうだけ。/ Z
(A: Zうーん)

(2.8) A: 20以上あるんだろ? /

(2.9) B: うん。/

2. 5 「日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—」

ザトラウスキー (1993) では、文字化資料の右側に発話機能が記号化されて付されている。

文字化は基本的に漢字仮名まじりで表記される。発話は、沈黙があった場合と、参加者が交替する箇所の一つの発話を区切り、行をかえて表記されるが、以下の場合も行をかえるとある。接続助詞で示された従属節が、発話中に二つ以上連続する場合、文や節が終助詞で終わっている場合である。倒置は、行をかえない。あいづちは行をかえるが、「相づち的な発話」は、先行発話の終わる位置に表記する。例外として、〈自己注目表示〉の機能をもつ「相づち的発話」

は、右側にはよせない。

会話の重なりは「//」で表記。沈黙の長さは会話のリズムに応じて記される。イントネーションについては、上昇と下降の二種が「?」「。」で示される。「!」は、「最初のモーラが高く始まり、その後少し下がるが、下降のイントネーションほどは下がらないものを示」している。

談話は、話段、発話という、より下位の単位に分割できるとする。発話は話段の構成単位とされるが、杉戸の定義を踏襲し「一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続（笑い声や短いあいづちも含む）で、他の参加者の音声言語連続（同上）とかポーズ（空白時間）によって区切られる」としている（64頁）。文字化には、談話、話段が示されている。「発話」は、先に記したように、必ずしも一行では表記されていない。

発話機能は、国立国語研究所「談話行動の諸相」（1987年）に発表されたものを一部修正して用いたとある。発話機能は、「会話を分析する際の単位ではない（67頁）」とされ、発話には、二つ以上の発話機能をもつものもあるとしている。下図の「注目要求→」など左側が「勧誘者の発話機能」、「↑（継続）の注目表示」など右側が「被勧誘者の発話機能」である。

以下に、文字化の一部を引用する（別冊資料15頁）。

ザトラウスキー（1993）の文字化

お茶の誘いの談話：

勧誘の話段1

19B	あのね?	注目要求→
20A	うーん。	↑（継続）の注目表示
21B	今、Tと飲んでるかもー。	情報提供
22A	+どこでー。	←情報要求
23B	すずめー。	情報提供
24B	//きち	情報提供
25A	+//どこのー。	←情報要求
26B	吉祥寺。	情報提供
27A	ー まじー。	↑（確認・感情）の注目表示
28B	ー そいでねー//ー?	談話表示
29A	うん。	↑（継続）の注目表示
30B	ー Tがね//ー?	情報提供
31A	うん。	↑（継続）の注目表示
32B	ー Aとお茶でもしたいって言うかも//ー。	情報提供
33A	ー何だよ。それ。	←情報要求・↑（感情）の注目表示
34B	ー [笑い]	笑い↑

2. 6 「自然な談話における「繰り返し応答」のバタンとタイミング」

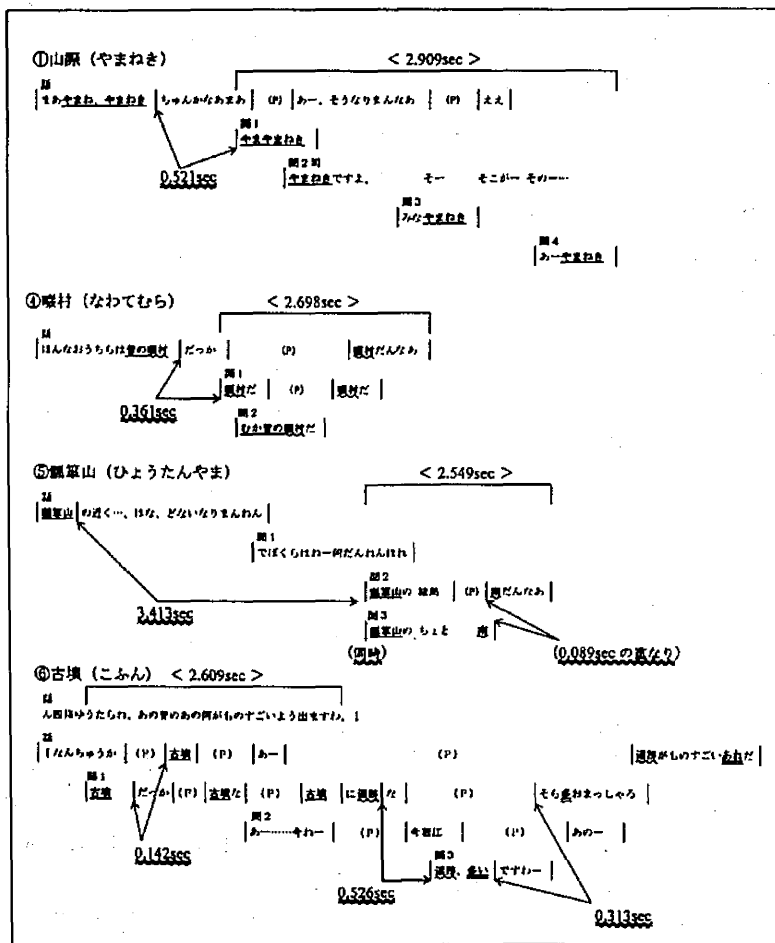
杉藤美代子他（1999）は、大阪府河内に住む4名の男性話者と司会者（女性）の会話を収録、文字化し、座談の開始から45分について「繰り返し応答」を抽出している。話がはずんだた

め、それぞれの発話には時間的な重なりが多い。先行する発話の末尾と「繰り返し応答」の始まりまでの時間、聞いてその言葉を繰り返すまでの時間は、最も短いもので0.142secであり、最長は3.413secであったことを明らかにしている。

発話の重なりは、狭帯域スペクトログラムを聴覚と視覚の両者をもって観察し、時間的位置を測定している。実時間とともに進行するイメージで表記された文字化資料に、重なりの実測値を記入する方法で表記されている。「繰り返し応答」に目的を絞って、重なりの実測値情報を書き入れる目的で文字化された資料である。

以下に、文字化の一部を引用する (13頁)。

杉藤他 (1999) の文字化



3. 談話文字化における問題点と課題

3. 1 何をどのように何の目的で

以上、談話の文字化に関して具体例をあげた研究をふりかえった。これらも参照しながら、

文字化の際の問題点と課題を整理しておきたい。

文字化の際に踏まえなければならないのは、次の三点である。

- (1) どのような情報を文字化するか
- (2) どのように文字化するか
- (3) 何の目的で文字化するか

どのような情報をどう文字化するかは、談話研究の目的と密接に関係する。談話は、先にも述べたように、同時にいくつもの情報が提供されつつ実時間に添って展開していく。どのような情報を研究上必要なものと認めるのか、また、それをどう文字化するかは、研究目的を明らかにした上で、条件を満たす文字化の方法を検討するしかない。談話というのは膨大な情報の集積であるので、コミュニケーションに関与する有用な情報を特定していくには、目的をしぼりながら研究を進めてみなくてはならない。過不足なく談話を写した完成された談話テキストの記述に向かって、小目的を定めながら少しずつ進むしかないというのが、現状である。

文字化に際しては、エティックなレベルとイーミックなレベルのどちらで記述するのか十分に意識しながら進まなければならないだろう。言語音でいえば、音声記号で書くか、音韻記号で書くかの違いがある。研究目的によってどちらの表記を用いるか決まってくるが、ふたつのレベルがあることは認識されている必要がある。

ただし、どんな研究をするにせよ、最終的に談話のしくみの解明を目指すのなら、まず考察しておかなければならないことがある。それは、談話の姿と単位の問題である。

談話研究において、音声というものの正しい認識はきわめて重要である。談話においては、意味は、音声という形によって担われる。これが姿である。また、談話研究においては、音声はどのように意味を伝えていくのかを知ることも大切である。談話レベルでの単位を見出すことがその第一歩になる。こうした考察がなければ、談話のどんな側面に光をあてようとしても、談話を正確に捉えることはできまい。談話の捉え方が文字化に反映されるのであるから、文字化によって正確な談話テキストを作成することを目指すならば、表記するか否かは別として、姿と単位についての認識をもつことは大切である。談話の姿についてはこのあと第4節で、談話の最少単位についてはこのあと第5節で考察したい。その前に、文字化資料の作成媒体と共有化の問題についても、ふれておきたいと思う。

3. 2 文字化資料の作成媒体と共有化

ここでは、以下の4点に触れておきたい。

- (1) 冊子テキストと電子テキストの作成
- (2) デジタル化した音声付映像資料との連動
- (3) 利用者の裁量で情報が追記できる設計
- (4) 「成長するデータベース方式」の採用

(1)について。冊子テキストは、視覚的な問題からあった方が便利である。しかし、検索の便を考えると、電子テキストが重要である。パソコンのソフトウェアに依存しない汎用性、継続性を考えると、テキストファイルでの作成が望ましい。文字列の検索能力が高いエディタで開けるように半角80桁でおさめた配置が適当である。

非言語情報は、目的によって必要なものは記号化して文字化する必要があることはすでに何

回か述べた。ここで、特筆しておかなければならないのは、それらの記号は、いわゆる「タグ」ではないということである。

「プレーンテキスト」と「タグ付テキスト」という概念の別がある。文章テキストを電子化した場合、品詞や活用、あるいは原典の記載頁、行などを、当該の文章以外に盛り込めば、それはタグ付テキストになる。文章はすでにあるものなので、(注4)「プレーンテキスト」と「タグ付テキスト」が対立概念になるのである。しかし、談話テキストには、そもそも「プレーンテキスト」という概念が該当しない。談話の情報伝達のあり方を忠実に文字化しようとするれば、文字列のみのテキストにはなりえない。文字列以外の情報を記載していないテキストは、談話のごく一部をしか文字化していないのである。文章のテキストとは異なる性質をもつ談話テキストは、談話の情報伝達に関与する記号を過不足なく記載した姿がいわば実体であり、「プレーン」なのである。そこから、検索や研究の便のための情報を加え、加工してあればそれがまさに「タグ」にあたるのである。ザトラウスキー(1993)が記した発話機能などは、分析上付されたタグにあたる。

談話のしくみを解明する目的で談話テキストを作成する場合は、上述の意で「プレーン」なものを提出することが目的であり、それが成功すれば「プレーン」な談話テキストそのものが高い説明能力を蔵していることになる。

(2)(3)について。文字化の妥当性について検証したり、研究上別の情報を再文字化して加える場合を考えると、音声付映像資料は添付しておきたい。事情が許せば、劣化しないデジタルデータが望ましい。音声付映像資料といえども場面の一部を再現するに過ぎないことは認識する必要がある。しかし、それがあつた方が研究は格段に進歩する。

(4)について。人的ネットワークによって資料の提供を容易にし、成長するデータベースを作成するプランについては大西(2000)の「JDnet」の提案などがある。(1)の議論がもう少し進展しなければ(4)へは進めないので、本論ではひとまず措く。

4. 談話の姿と文字化

談話の文字化に際しての必要条件は、私見によれば以下の2点である。

- (1) 「私」と「私」の交替が明示されること。
- (2) 実時間に添った展開を示しうる表記であること。

「私」を手短に説明するのは難しいが、「この世界を構成する唯一の視点のこと」である。それぞれの談話が意味するところは、当事者以外には伺いしれない側面がある。当事者はそれぞれが歴史を背負って世界を認める唯一の視点をもった「私」と「私」であって、それぞれに相容れない異質な他者の関係にたつ。

こうした「私」と「私」は、ある時には話し手になり、聞き手になる。そして、別の時には聞き手になり、話し手になる。両者の交替によって対話が進行していくのであるから、その姿が明示されるような表記でなければならない。三人以上の場合には、「雑居する時間」(注5)の問題が出てくるが、基本的には対話の場合と同様である。

また、談話は、実時間に添って、時には間があき、時には発話が重なりながらやりとりされていく。そうした実時間の実相が明示的に表記されることが望ましい。

上記2点を満たすためには、国立国語研究所 渡辺班(1980)が採用した、実時間に添って、話者の交替の様が明示された表記が、近い姿である。これを、オーケストラなどの楽譜になぞらえて「楽譜方式」と名づけた。研究目的によっては楽譜方式表記をとらない、あるいはとれない場合にも、会話は実時間に添って不可逆的に展開される姿を持つことを忘れないようにしたい。

ところで、実際に楽譜方式に拠ろうとすれば、音声記号を用いて表記し、分かち書きはせず、発話の実時間に合わせて間があれば空白で示し、間がなければそのまま続けるということになる。たとえ語の途中で空白が生じてもそれに即して表記していく。

しかしながら、楽譜方式を採用すれば、現実的な問題として発話の重なりは厳密には表記できない。また話の遅速は表記できない。実時間を横軸にとり、早く発話された場合には実時間距離の中に文字を小さくして、遅く話された場合には文字を大きくして示さなければならないことになるが、現実的に無理である。汎用性と保存性のために、電子データはテキストファイル形式が妥当であることは先に触れたが、テキストファイルは文字の大きさを変えることはできないので、話の遅速の厳密な表記はあきらめなければならない。時間の目盛りを記入する方法に頼ることもできる。これはタグを付すということである。話の遅速や話の重なりなどの研究のためには、音声付映像データに戻って目的に応じた何らかの表記法を用いる必要が生じる。たとえば、杉藤(1998)の文字化のようなものになろう。(1)(2)を満たすことを基本とし、目的に応じて工夫することが必要である。

5. 談話の最少単位について

5.1 川上の「句」

談話研究において、音声というものの正しい認識はきわめて重要であると述べた。

談話がどのような単位で形成されているかの考察は、音声そのものに即して観察されることが必要である。

先行研究では、談話の最少単位に関する考察がメイナード(1993)にあり、PPUであると主張されている。これは、ポーズで区切られる単位である。しかし、音声が意味を担う姿を考えると、ポーズをもって定義することには疑問が生じる。意味を担う単位のひとつとしてイントネーションがあることは知られている。イントネーションの表記自体は、先行研究でも意識されていたが、単位と関係して論じられてはいない。こうしたことを考慮しながら、以下、川上蔡氏が提唱し続けている「句」という単位についてここにとりあげ考察したい。なお、「句」は音調単位であって、文法論で説かれる句とは異なる。

川上(2000:8)は、次のように述べている。

- (1) つとに私は「句」という術語を提唱し、上昇は句の始まり(単語や分節の始まりではなく)を示すこと(音韻論的に無意味だなどと言いつけられるべきものではないこと)を説き、アクセントとは別の次元のその上昇現象を「句頭音調」と称した。句とは、その途中で切れ目を感じさせない、長さ不定の言葉である。

川上は、昭和30年代というごく早い時期に音調からみた「句」という単位を見出し、一貫してその存在を主張して現在に至っている。川上(1985)が上梓され、氏の仕事の全容を知る

ことができるようになったのは幸いである。

川上は、東京語のアクセントについて段階観を否定し、下降そのものの有無、位置だけを抽象した動的アクセント観をとる。たとえば、カンゴフ〈看護婦〉はゴで下がるが、その下降契機がゴとフの境界にあるとする。アクセントとしては、その下降契機の位置だけを示せば足りるのである。それを「^ˈ」で示す。

一方、上昇音調は、アクセントではなくイントネーション的単位の始まりを示すものだとする(川上(1957: 85-86)川上(1961: 134))。(注6)上昇と下降の解釈については、上野(1989)がほぼ同様の考え方を示している。

さて、上昇は単語に生得の特徴などではなく、逆にあったりなかったりする現象であることを示し、話し手が感じたこと、こだわったこと、注意を促した場合などに、そこで上昇が起こることを次のような例で指摘している。以下(2)から(4)の例では、「妹」という単語のイからモにかけての上昇はあったりなかったりしていることに注意したい。「^ˈ」は上昇の位置、「^ˋ」は下降の位置を示す記号。以下、用例と説明は川上(2000: 8)

(2) イ^ˈ「モート

(3) キ^ˈ「ミノイモート

(4) ダ^ˈ レノイモート^ˋ ダ

また、「あなたの妹です」を発話する次のような音調の例をあげ、(5)と(6)では、話し手の意図が異なって解釈できることを指摘している。

(5) ア^ˈ「ナ^ˋ タノイモート^ˋ デス

(6) ア^ˈ「ナ^ˈ タノイ^ˋ「モート^ˋ デス

(5)は、特に「あなたの妹」だということにはこだわっていない発話であるのに対して、(6)のようにイからモにかけて上昇がみられると、「そこで話し手が心を新たにすることを示し、「アナタノから引き続いて惰性、余力でイモートを軽く言い流してはいけないと話し手が感じたこと、イモートという語にこだわったこと、重く見たこと、この語につき聞き手に注意を促したことなどを表わす」のである。

この、上昇の位置によって区切られる単位を川上は、「句」と呼んでいる。(5)は、全体でひとつの句、(6)は、上昇のあり方から、二つの句でなりたっている。上昇の位置は単語の特徴ではなく、「句」の特徴であると説明されるのである。

また、「句」は、上昇の位置で話し手の感情を示すものでもある。次の「私の、あれは、姉ですよ。」という発話は、それぞれ別の主観的意味を表している。川上(1957: 86-87)。「^ˈ」は、句切れを示す記号。

(7) ワ^ˈ「タシノアレワ^ˋ | アネ^ˈ「デ^ˋ スヨ 遅上り型句頭音調

ワ^ˈ「タシノアレワ^ˋ | ア^ˈ「ネデ^ˋ スヨ 並上り型句頭音調

ワ^ˈ「タシノアレワ^ˋ | 「アネデスヨ 早上り型句頭音調

さて、川上、上野は、音調研究において上昇の位置を観察することによって、「句」という単位の存在を指摘した。両者にとって、句というものはあくまでも「音調単位」であり、広義のイントネーション単位であった。

イントネーションは意味のまとまりに関係している。ここでは、「句」を、以下「談話を形成する最少の単位」として定義しなおしたい。メイナードは、談話の単位は文より小さいこと

を指摘した。これは事実であるが、しかし、それはポーズで定義されるPPUではない。イントネーション単位として定義される「句」である、というのが本論の主張である。

5. 2 談話展開と「句」

談話の単位は、文ではなくて「句」である。「句」とは、先に本節(1)で引用したように「その途中で切れ目を感じさせない、長さ不定の言葉」である。話し手の考えのまとまりや感情を表わすことができる。

文章を分解してまず得られるのは、「文」という単位である。文が文章の直接の構成要素であり単位をなしていることは定説通りであるといっていよう。文章テキストは、呼吸時の息のあり方や一時の記憶負担量からくる量的制約から開放されている。しかし、現実の場面の直接的支えがないため、文章は文字列だけで意味が再構成されるように表現されなければならない。そのためには、述語が支配する格を言語化し、整備された文を産出する必要がある。文章の作成には規範的な意識も働き、時間をかけた推敲も可能である。整った文章であればあるほど、文章構造のはっきりとした、また、一読して文意が通るような文の集積で書かれた文章が出現する。文章は、その完成度ということの問題にすることができる。完成度や美意識の審査の対象としるように、文章を練ることができるのである。

それに対して、談話の場合には、相手の出方によってこちらの話す内容が変る。語られたそばから音声は消えていってしまうので、記憶にきざまれたところにしがたって話は進展していく。相手の話の確認だけではなく、自分の話自体も自分自身で確認しながら進展していく。言い直しや、訂正もある。こうした中では、完成した文のような単位を繰り出すことはなかなか難しいし、双方の記憶の負担からいっても、内容が分かる程度にできるだけ短く、的確なことを用いた方がよい。また、談話では、言葉の文字列の比重は相対的に下がり、五感を利用し、場面情報を活用しながら伝達が行われる。複数の媒体が同時並行的に利用されるのが談話のコミュニケーションである。

談話においては、言葉は声で表現される。音調という手段に頼って意味のまとまりをつけるシステムは、考えながら話す談話にはうってつけである。「句」という単位は、あらかじめ定まった長さを持つものではない。話し手の考えること表現したいことに対応して、短くも長くもまとまりをつけることで、聞き手は、その音調を手掛かりに、話し手の言いたいことを「句」の意味のまとまりで捉え、「句」が次々に短く繰り出されるのを手掛かりに、きめ細かく相手の思考を追うことができるのである。そして、句の切れ目で言葉をさしはさむこともできる。川上(1961: 136)は、次のように、句音調は息の切れ目で定義されないことを指摘している。

- (8) 切れ目というのは、(中略)息の切れ目に限ったものではなく、さらに意味が広い。たとえ息の切れ目がなくても、言葉がとぎれた感じを与えられることはある。そこで、言葉に切れ目の感じを与えるものを総てひっくるめて「言葉の切れ目」と小稿では呼ぼうと思うのである。では、言葉の切れ目における、息の切れ目以外の要素は何か。それは、音調である。しかも、音調こそ言葉の切れ目の本質である。音調的な切れ目を伴わぬ息の切れ目は、まず不可能に近いが、逆に、音調的な切れ目は、息の切れ目を伴わぬ場合が少なくない。

つまりは、句音調というものは、主体的に考えながら意味のまとまりを繰り出していくものであり、息の切れ目というような物理的な制限とは異なって、話し手が自由に操ることができるものであることを示している。

文章は、目的をもって産出された表現がそこに存在する。時枝（1977：68）が述べるように「文章の経験は、常に表現の展開をたどる継時的行為としてのみ成立する」ことは確かであろうが、一端読了すれば内容はすでに読み手が知った事柄となり、全体をあとづけてその構造を問うことが可能になる。なぜなら、文章というものは、はじめから構造を意識して書かれるべきもので、実際そう書かれた文章を我々は文章とみなすからである。

しかし、談話は、こうした「あとづけ」では捉えることができない。実時間とともに推移する不可逆的な性質を持つのは、文章ではなく談話である。談話は常に実時間とともに当事者によって推進され、展開されていくものである。その展開は、一字一句たがわず文字に移されることなど、一般の言語生活においては想定されていない。即興を写譜するように談話を写し、それを研究上、文字化資料とするにすぎない。文字化により作成される談話テキストは、当事者の中でやりとりされた談話の軌跡であって、その全体が読まれる目的をもって産出され推敲された文章とは異なるのである。

文章は静的、談話は動的であるともいえる。文章は、静的な構造を問うことができるが、談話では静的な構造は問うことが難しい。動的な構造化のあり方が談話研究の中心的課題である。その場その場の舵取りのあり方や、長い談話の中ではその全体を双方がどのように関係づけていったか、どのように対話が推進され展開されたかを解明することが談話研究の目的であり、研究上のとるべき視点である。「談話における構造化の方法」は問えるが、「談話における構造」を問うことは、文章構造を問うことと比べてより多くの何かを切り捨てることになることは確かである。また、双方が構造化の意志をもって成された談話は「あとづけ」で構造を問いやすが、そうでない談話は、構造を問うことが無意味になる場合すらある。

このような言語観にたてば、川上泰、上野善道が提唱した「句」という単位は、意味のまとまりと関係するために、発話主体が操作的に使用可能な単位として、談話推進、談話展開において有効に機能していると述べるができる。現代共通語において、談話主体は、意味のまとまりを形式化できるイントネーション単位であるこの句を利用して談話を生成している。また、聞き手は、句を手掛かりに意味のまとまりを受け取り、理解を行っている。談話における最少単位は、発話主体が表現しようとする内容をひとまとまりの姿として差し出すことを可能にする、内容主導・形式随形型の、音調により形式化される単位である。

5.3 句末、文末の上昇調について

川上（1963）は「文末などの上昇調について」と題された論文である。ここでは、文末の上昇、句末の上昇がとりあげられ、狭義のイントネーションについてプロミネンス（卓立）の弁別ともからめながら整理されている。

それを簡単に記し、これも意味の弁別に関係する声の上げ下げとして談話テキストに記載したい。

文の末端に現れる上昇調は、川上によれば次の四種の型に分類できるとされる。

- | | | |
|-----------|-----|--------|
| (9) 句末上昇調 | 第一種 | 普通の上昇調 |
| | 第二種 | 浮き上がり調 |
| 文末上昇調 | 第三種 | 反問の上昇調 |
| 末端卓立調 | 第四種 | 強めの上昇調 |

第一種の「普通の上昇調」は、句末にもあらわれる。文末は、その文の最後の句の末にほかならないので、結局、第一種の上昇調は句末の上昇調である。第二種も、同様である。「相手とのつながりを求める気持ちを表わす」のが上昇調の意味である。第一種はより重い態度、第二種はより軽い態度をあらわす。第三種は、文末にしかあらわれない。第三種を音調の形から第一種と区別することはできず、両者、上昇をあらわすが、型として異なる。第二種の上昇調は、アクセントの滝を打ち消す力をもつが、第三種の上昇調にはその力はない。第三種の意味は、反問。第四種は、任意の長さの単位の末端の一拍が、その前後の部分より高まる。イントネーションというよりはプロミネンスで、「末端卓立型強調法」と名づけてもよい。第四種は本質的に強めである。第一種と第四種は似ている場合があるが、強さにおいて違い、それが意味の違いをもたらす。

第一種、二種の上昇は「↑」であらわされている。第一種と第二種は上昇する句末の位置が異なっている。第四種は上昇に強めを加えて「↑↑」で表記される。第三種は一段下がった所から発して上昇するから、「↓↑」と「↑↑」の組合わせで表記できる。

以上、川上の観察をひとまず借りたい。なお、近年聞かれるようになった、句末拍が長音化し、上昇・卓立をみせて下降する音調は川上ではとりあげられていない。この聞き取りと解釈の問題や、その他談話の最少単位と音声的相の関係については、更に研究を進める必要がある。課題としたい。

6. 句を表記した談話テキストの一例

句を表記した談話テキストの一例を以下に掲げる。

ここでは、東京生え抜きの話者によらない共通語の談話を文字化した。現代の共通語化の趨勢と日本語話者中占める東京ネイティブの割合からいえば、大多数は東京方言以外の母方言をもちながら共通語を話す人々である。こうした人々の共通語には「気づかれにくい方言」も含めて方言の干渉がみられる。東京語の音調とは異なるものも見出されるかもしれないし、それを記述するには、できるだけ音声を観察できるような表記がよい。「句切れ」の位置は音韻論的解釈に入るであろうから、多少読みにくいのが、第1次文字化は音の上がり下がり強めのみを記す。音声記号は具体音の表記であるとはいえ、抽象された記号でもある。音声記号程度の抽象をかけた表記を試みようとしたのである。

簡易音声記号で表記し、川上に従って、上昇する位置に「↑」を、下降する位置に「↓」を、句末、文末の上昇には「↑↑」を付した。句末の上昇と強めは、「↑↑↑」で表記。句の切れ目にあいづちが出てくるが、あいづちの無音化した頭の縦ふりは「*」で表記した。これも句の切れ目に出ている。ただし、重なりについての厳密な表記にはこれでは限界があることは、先に述べた通りである。緩急については、人間の息の長さから推して、以上の表記で見当がつく場合もある。また、移動動作が伴う会話における声の大小や身体の向きなどの考察は、今後の課題

である。

話者Aは大学教官、話者Bは、翌日卒業式を控えたそのゼミ学生である。ノックして部屋に入ってくるところを文字化した。音声付映像資料の公開については別途考えたい。以下、調査の概要も含めて記す。

文字化の目的：談話の最少単位の発見と検討

収録の概要：収録日 2000年3月14日 18:05～18:55

収録場所 信州大学人文学部沖研究室

収録者 沖 裕子・斎藤有紀恵・青柳にし紀

収録方法 8ミリビデオ2台とカセットテープ1台で映像と音声を収録

文字化の概要：簡易音声記号を使用。Aを上、Bを下にした楽譜方式。音の上昇、下降の位置および卓立を文字化。以下は、文字行の下の方に記した。頭の縦ふりを、「*」。状況の最低限の説明を「# ()」。「×」は聞き取り不能箇所。

話者Aの生年・性別：1955年 女性

話者Aの言語経歴：0-18；長野県松本市，18-27；東京都区内，27-32；和歌山県海南市，32-38；奈良県奈良市，38-45；長野県松本市

話者Bの生年：1977年 女性

話者Bの言語経歴：0-18；埼玉県大宮市，18-22；長野県松本市

状況の概要：学生Bは4年生で、翌日に卒業式を控えている。指導教官であるAの研究室を尋ねる。アポイントメントはとってあったが、どんな用件かAは知らされていない。これは、この教官と学生にとって、日常的な面会のしかたである。一週間前にゼミの研修旅行で韓国へ同行しているので、親しみの余韻が残っている。話者Bがインフォーマントになるのは2回目。目的と方法をよく理解し、収録後のインタビューでは、ふだんとかかわらず自然であったとのこと。教官Aについても同様。

内容の概要：Bがノックをして教官Aの研究室に入り、用件を告げる。明日の卒業式の翌日、ゼミ仲間の4年生とともに教官宅に招かれているが、その折の正確な時間や服装について尋ねている。(詳細は卒業式の日に伝えるということになっていた。)以下の文字化は、1件めの用件の切出し部分まで。

楽譜方式で句音調を記した文字化

A 「ハイ」「ドー」ゾー

B シ「ツレー」シマース

(ノック) # (ドアを開けて入る)

A 「アー」 「ハイ」「ドー」「ゾー」

(その場でたちあがり、やや離れたドアの前のBに声をかける)

B ス「ミマセ」ン 「ヨ」イショ

A 「サ' ード' ーゾ

B 「アース 「イマセ' ン 「ハイ 「アリガ' トーゴザイマ' スキョ'
(笑)

A 「ド' ーゾオ 「カケク

Bーワス 「イマセ' ンデシタ 「ジカンオト' ッテイタダイ 「テ"

Aダサ' イ 「ハ' イ
(着席する)

B 「エット' ー 「アノーフ 「タツー 「ア' ルンデスケード 「モ"
(着席する)

A 「ハイ 「エ' ッ 「ハ' イ

B' ー エトヒ 「ト' ツ 「ワ''' ーアノー エー 「ジューロックニチノー コ 「ト'

A *

Bナンデスケ 「ド''' ー 「チョ' ットニネ' ンセ' ート' カノマ' エダトハ 「ナシニク'

A *

Bカッターノ 「デ''' ー アノジュ 「ーロックニチー' ワ''' エトー ド 「ノヨ' ーナカッコ
(笑)

A *

B×オシ 「テイッタ' ライ' ーカッテイウコト 「ト''' ア' トジ 「カン ノセーカクナジ
)

A 「エー

Bカンデ' スト 「カ''' ー 「ア' トー ナ' ンカコ 「チラーデードード 「ンナフ' ー

A

Bニ ウ 「カガ' ッタ' ライ' ーノカ' ナンテイウノオヨネンセーデハナ' シテタンデ
(笑)

- A 「アーツ' - デスカ 「フーン 「エ' - 「エ' -
- B スケ「ド''' - 「ハ' イーヨ「フクト' カナ' シカ アノ「センセ' - ガ
)
- A 「エ' - # (笑
- B リョ「コーント' キニ 「チョ' ットキ' レーナカッコーオシ「テキ' タ「ラ' ッテオ
(笑
- A) 「エ' -
- B ッシャ' ッテタ' ノ「デ''' - 「キレー' ナカ' ッコーッテナ' シダローッテミ
) #
- A 「アーツ' - デスカ 「アツ' - 「オア
- B シナ' デユッテ' タンデ' スケ「ド''' - 「ドンナ 「ドンナ
(笑)
- A' - ハ「ナシッ' テソノコ「ト 「アーツ' - デスカ
- B ハ' イ 「ハ' イ「マ' ズヒツメ' ガ 「ハ' イソレナ' シンデス
- A (略)
- B ケ「ド''' - (略)

7. おわりに

以上、談話の最少単位は、メイナード(1993)が主張するPPU(Pause-bounded Phrasal Unit)ではなく、「句」であることを述べた。「句」は川上葵が発見した音調単位であるが、これが談話における形式上の最少単位として機能していることを本論では主張した。「句」とは、「その途中に切れ目を感じさせない長さ不定のことばで、句頭に上昇音調を持つイントネーション単位」である。イントネーションは意味のまとまりと関係している。

談話と文章は異なった姿をもっている。文章は、文を形式上の単位とした構造体であり、構造化をめざして推敲を重ね、産出される。そのようなものを我々は文章と呼ぶ。それに対して談話は、異質な他者どうしが実時間に添って不可逆的に、言語音以外の情報を同時並行的に活用しながら推進、展開させるものである。推進、展開させるためには、話し手自身も考えながら言葉を繰り出す必要がある。句は長さを問わないために、話し手が意味のまとまりを自由につけながら、ある程度長くもごく短くも繰り出すことができる。現代共通語では、このように

意味のまとまりを自由につけられるイントネーション単位である句を最少形式として利用している。談話における最少単位は、発話主体が表現しようとする内容をひとまとまりの姿として差し出すことを可能にする、内容主導・形式随行型の音調形式であり、これによって、様々な現象の説明が可能になってくる。

談話の文字化は、どのような情報をどう記すか、研究目的によって検討される必要がある。談話に利用される情報は多岐にわたるから、現段階ではすべてを文字化することは困難である。文字化は、談話のしくみの解明と手を携えて行われる。研究対象の絞り方によっては表記不能な場合があるにせよ、談話テキスト作成に際して、談話の姿と単位の考察は怠るべきではない。談話は実時間とともに「私」と「私」が交替する姿を明示する「楽譜方式」を基本イメージにおきたい。また、最少単位である「句」を意識した文字化が工夫される必要がある。

「句」より上位の単位、また、文法的単位との関係については今後別に論じたい。「句」を談話の最少単位と認めることによって説明可能になる現象についても記述する必要がある。

【注】

(注1) 談話と文章には、連続的な側面もある。文章を読みあげる「読みことば」や、知己の間で時間をおかずやりとりする手紙や電子メールなどの分類の問題があるからである。

(注2) これは大雑把な議論で、実際はその文章が誰によって書かれたか、どのようなジャンルだと判断されるか、などが読解の前提として影響を与えてくる。

(注3) 録音テープを参照しながら、という意味にはとれない。

(注4) 校訂の問題は措く。

(注5) 茂呂(1999)参照。

(注6) 以下1995年以前の論文は閲覧の便を考慮して収められた川上(1995)の頁で引用し、論文の発表年は発表時で記す。

【参考文献】

- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」杉藤編(1989)所収
沖 裕子(1993)「OCRとエディタ検索による個人的フルテキストデータベースの構築と活用」『花園大学国文学研究』
沖 裕子(1994)「話し言葉テキストの性格と電子化テキスト化」『人文科学とコンピュータ』22巻5号
大西拓一郎(2000)「方言研究とネットワーク—JDnet 構想—」第89回変異理論研究会発表資料
川上 葵(1995)『日本語アクセント論集』汲古書院
川上 葵(2000)「具体音声から抽象されるもの」『国語と国文学』第922号 東京大学国語国文学会
国立国語研究所(1978-1987)『国立国語研究所資料集10 方言談話資料(1)~(10)』
国立国語研究所(1987)『談話行動の諸相—座談資料の分析—』
国立国語研究所 渡辺班(1980)『談話行動の総合テキスト—東京・下町・資料(1)—』(科学研究費補助金 特定研究「言語」・渡辺班)
ザトラウスキー, ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版

- 杉藤美代子編 (1989)『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』明治書院
- 杉藤美代子・Nagano-Madsen, Yasuko・北村美穂 (1999)「自然な談話における「繰り返し応答」のパターンとタイミング」音声文法研究会編『文法と音声Ⅱ』くろしお出版
- 時枝誠記 (1977)『時枝誠記博士著作選Ⅲ 文章研究序説』明治書院
- メイナード, 泉子・K (1993)『日英語対照研究シリーズ(2)会話分析』くろしお出版
- 茂呂雄二 (1999.1)「開かれたディスコース概念のために」『月刊言語』第28巻第21号 大修館書店

〔付記〕本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) (2)「東京・大阪方言の談話展開にみる接続詞の役割についての対照社会言語学的研究」(平成12・13年度/課題番号12610429/研究代表者沖裕子)の成果の一部である。アクセント研究史については、国立国語研究所、三井はるみ氏に御教示を賜った。記して謝意を表します。談話資料収集に御協力下さった方々に、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。